昭和48年2月1日発行 毎月1回1日発行 第22巻・第2号 昭和29年6月23日 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号 昭和30年3月24日第三種郵便物認可

# 航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー

WIDE COLOUR

三菱

零戦21型

☆特集☆ トンキン湾上の"エンタープライズ"

現代の戦闘機——その分類と運用

2の旧日R―G練習機メイクアップ7

'73 FEBRUARY 2

$2.50

# エンタープライズ（CVAN-65）の搭載機

〔上・下〕発進準備中と離艦するA-6Aイントルーダー。第196攻撃飛行隊（VA-196）"メイン・バッテリイ"の所属機である。両主翼下のパイロンには6発ずつ，500ポンドのMk82爆弾を装備している。

〔上〕艦橋からアングルド・デッキを望む。手前にA-7E（第27攻撃飛行隊機）、F-4J（第142戦闘飛行隊機）、A-6A、そして後方にもA-7EとA-6Aが整列している。〔下〕着艦するF-4J。VF-142“ゴースト・ライダーズ”の所属機。

〔上〕フライト・デッキのA-6B（右）とA-7A。A-6Bの主翼下に装備されているのはレーダー・ステーション破壊用ミサイルのスタンダード・アームAGM-78B。固定ロケット・モーターで推進され，飛しょう速度はマッハ2以上，到達距離25km以上という新兵器である。〔下〕A-7Aの主翼下に装備されるロケット弾。対戦車攻撃用のロックアイ・クラスター爆弾である。内側パイロンに装備しているのはMk82爆弾。

エンタープライズの特徴ある艦橋。甲板上に整列するA-7A、A-6の機首も見える。

〔上〕発進準備中のA-7EコルセアII。主翼下にはMk82 500ポンド爆弾。〔下〕第97攻撃飛行隊（VA-97）のA-7Eの尾部。この機体は第14攻撃連隊（CVW-14）の司令官機である。この連隊の傘下としてエンタープライズに配備されているもう一つのコルセアII部隊は第27攻撃飛行隊（VA-27）。

## YA-7HコルセアII-2

ダラスの海軍航空基地でテスト飛行をつづけているYA-7HコルセアII-2原型1号機。ドラッグ・シュートを開いて着陸滑走中。(L.T.V Photo)

このページと次ページもテスト飛行中のA-7HコルセアII-2原型1号機。前後席一体となっている風防は横開き式，前席は単座のA-7Eと同じで，後席は離陸と航法，着艦用の操縦装置を主とした装備となっている。前席に坐っているのは，本機を初飛行させたLTV社のベテラン・テストパイロットであるジョン・コンラッド氏。同氏は設計家としても本機の開発に参加している。(LTV Photos)

LTVでコルセアIIの複座練習型の計画がたてられたのは1966年。71年11月からV-519の会社呼称を与えて本格的に開発に着手することになったもの。自己負担の開発であるが、最近海軍では74年度に12機購入して、将来は2個飛行大隊分70機購入の意向を示しているといわれ、本機の前途は明るい。1号機は8月29日の初飛行後数カ月間は、ダラスの海軍航空基地で飛行テストがつづけられ、その後米海・空軍・海兵隊へのデモ飛行にまわることになっている。

## "ウイリアムテル'72" のF-102デルタダガー

F-102Aの部で優勝したウイスコンシン州エア・ナショナル・ガード（州航空隊）第115戦闘大隊（115FG）第176迎撃戦闘飛行隊（176FIS）の所属機。同航空隊の本拠はマディソン飛行場。
(Photo by Mr. Roy Look)

航空宇宙防衛軍団（ADC）の第57迎撃戦闘飛行隊（57FIS）の所属機。同飛行隊はアイスランドのケフラビック国際空港を基地に防空の任についている。

（Photo by Mr. Roy Lock）

（上・下）前ページと同じくアイスランドのケフラビックから参加した第57迎撃戦闘飛行隊のF-102A，尾部と胴体中央部のクローズアップ。同飛行隊のニックネームは"ブラック・ナイト"（黒い騎士）。尾翼と増槽にその絵を画いている。増槽に画いてあるF-102にまたがった"黒い騎士"がねらっているのは赤い星の旗，ソ連機を示すものという。
（Photos by Mr. Roy Look）

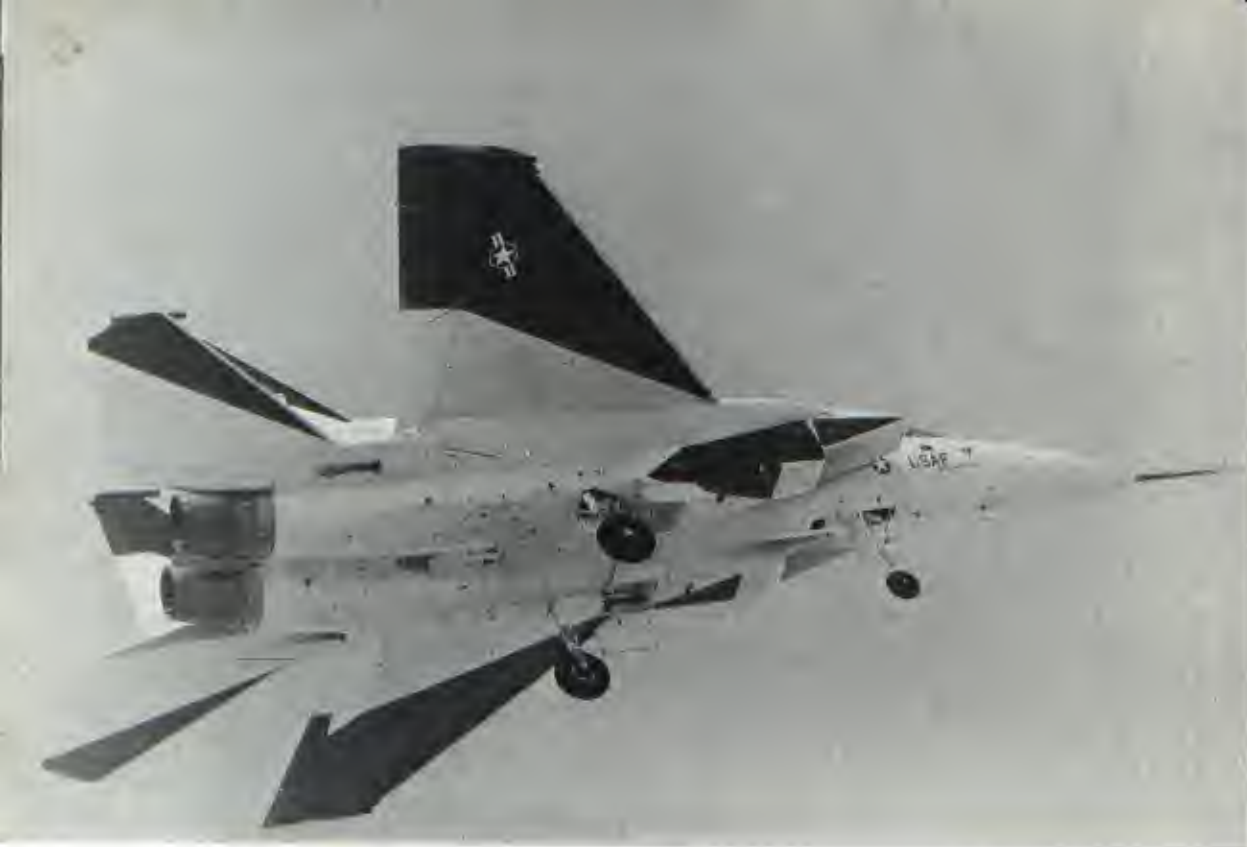
## 地球資源の開発にU-2

スパイ機だったU-2の２機が，71年９月はじめから，平和目的の地球資源開発用に活躍している。この２機は胴体前部に特殊カメラ４個を収めるほか，胴体上部には新たに尾翼にまで達するバルジが設けられている。目下は，米本土の５地域を指定し，そこでERTS（地球資源技術衛星）やスカイラブと協同で基礎調査を行なっているほか，天文学や高々度大気物理学などのデータ収集もかねた飛行をしている。

**ロータリー・シリンダー付きの OV-10A**

YOV-10A観測機を大改造して，フラップの前に回転する大きな円筒を付けた研究機がいま，NASAの手で試験されている。この円筒は2基のエンジンで直接駆動され，両エンジンもシャフトで連結されている。また，フラップも特別に90度近く下るダブル・スロッテドのものにされ，プロペラは4翅になっている。この円筒を用いると，主翼上面の気流をはく離させないで下へ向けることができ，低速でも性能が大幅に向上するといわれる。

## C-8A改オーグメンター翼機

ボーイングとデハビランド・カナダ両社が共同で製作し，NASAとカナダの産業通商省がスポンサーになって実験が行なわれているオーグメンター翼機の飛行ぶり。本機はジェット排気を主翼後縁の上下2枚ずつのフラップのあいだから吹き出して飛行するもので，将来の実用STOL機の一つの有望な形式として注目されている。機体はC-8Aバッファロー輸送機をベースに造られ，エンジンはロールス・ロイス"スペイ"ターボファンを1基ずつ収めている。

## F-15 "イーグル"

翼端部を赤く塗って飛行テストをつづけているF-15"イーグル"原型1号機。これは新しいアングルのスナップである。エドワース基地の飛行テストには，まもなく2号機も参加することになっており，初飛行後，同所で18カ月間にわたって評価を行なうことになっている。

## YA-7Hコルセア II-2

テキサス州ダラスの海軍航空基地でテスト飛行に飛び立つYA-7H原型1号機。本機は今後数カ月，同所でテスト飛行がつづけられる。下の写真で右翼下のパイロンに吊した増槽，左翼下のスネーク・アイ爆弾がよくわかる。複座となったYA-7Hは，A-7Eより機首が少し延長され，全高も高くなって，空虚重量もやや増えている。

## 勢ぞろいしたハリアー

海兵隊の最初のハリアー部隊，第513海兵攻撃飛行隊（VMA-513）の13機のAV-8Aが参加して，このほどカリフォルニア州ポイント・マグー射場で行なわれた空戦演習の模様。サイドワインダーAAMや30mmアデン砲など，各種の武装の射撃演習が行なわれた。写真上は30mmアデン砲を翼下に装備したAV-8Aの編隊飛行。写真下は発進前，チャイナレークの海軍ウェポンセンターでの機体の点検。

## 中国民航（CAAC）のトライデント2E

中国民航（Civil Aviation Administion of China）が12機発注しているトライデント2Eの1番機が，このほどロンドン近郊のハットフィールド工場で，駐英中国大使に引渡された。写真は引渡しに先だってデモ飛行中のもの。12機の発注総額は約5,500万ドル。

## セスナXMC研究機

セスナ社が新型機開発の研究機として，テスト飛行を行なっているXMC（Experimental Magic Carpet）機。推進式のリア・エンジン形式，視界をよくするためにキャビンの窓は思い切って大きなものとし，パイロットの席もカージナルス・シリーズと同じように主翼の前方に位置するように配備されている。プロペラをダクトでつつんだ“シュラウデッド・プロペラ”形式としたのは，離陸時の推進効果と騒音の減少をねらったもの。

# トンキン湾のエンタープライズ

ENTERPRISE CVAN-65 IN TONGKING GULF

90,000トンの巨体に航空機を満載してベトナム海域で作戦中の米原子力空母エンタープライズ(CVAN-65)。これはこのほど同艦に同乗。同海域での作戦行動を取材した日本のカメラマンがとらえた搭載各機のスナップ。次号と連載でお伝えしよう。[前ページ]帰艦するF-4JファントムII。第142戦闘飛行隊（VF-142）の所属機。

[上]特徴あるエンタープライズの艦橋と甲板上の各機。F-4Jのほかに、C-1A、A-6A、SH-3Gヘリなどが見える。[下]発進準備中のF-4J。これもVF-142の所属機。胴体下に600ガロン増槽、主翼下の内側と外側パイロンにサイドワインダーAAMを1発ずつ吊した迎撃戦闘装備。

〔上・下〕同じく発進準備中のF-4JファントムII。ともに第143戦闘飛行隊（VF-143）の所属機である。下の写真はふだんなかなかおめにかかれない上方のアングルからのスナップ。パイロンに1発ずつ装備されたサイドワインダーもよくわかる。後席の乗員が乗り込み、主翼をのばしてまもなく発進。

〔左上〕艦橋より前部
行甲板をのぞむ。手前に
-4J、右側にはA-6、C
A、E-2B、RA-5C、
KA-3Bなどが並んでお
前部甲板にはA-7Eコル
アIIが翼をつらねてい
左手をA-6Aイントルー
ーの1機が発進中。
〔左中〕出撃準備成
F-4J。これもサイドワ
ンダーAAMを装備し
142戦闘飛行隊の所属
ただいまエンタープラ
に配属されているファ
ム部隊は、このVF-1
VF-143の2個飛行隊

〔下〕F-4Jの操縦席付近。上方の珍らしいアングルからのクローズアップ。乗員の名前を書いた風防枠、座席から計器板までのぞくことができる。これもVF-142所属の1機。

（上）これもサイドワインダーAAMを装備したF-4J。VF-143の所属機。VF-143のニックネームは"パギン・ドッグス"（Pukin Dogs）。胴体にその部隊マークを描いている。同じく同艦のファントム部隊であるVF-142のニックネームは"ゴースト・ライダース"（Ghost Riders）。

（下）作戦行動のあいまをぬってお祈りをささげる乗組員たち。後方はA-6Aイントルーダー攻撃機。第196攻撃飛行隊（VA-196）の所属機である。同飛行隊はニックネームが"メイン・バッテリィ"（Main Battery）。A-6A、Bと給油母機のKA-6Dイントルーダーを装備している。

〔上〕着艦するA-6Aイントルーダー。右手にはF-4JとA-6Aが待機している。曇天、おだやかな海上、攻撃機を送り迎えるエンタープライズは、ひたすら風に向って突き進む。

〔左〕A-6に装備される爆弾、信管のとりつけ作業。出撃準備中の飛行甲板はあわただしい。爆弾を扱う兵員は赤いシャツ。しかし南の海での整備員は、上半身はだかも珍らしくない。

〔下〕攻撃先導・給油両機の役目をしているEKA-3Bスカイウオリア。第130電子偵察飛行隊（VAQ-130）の所属機

〔上〕左ページ下と同じくＶＡＱ-130のＥＫＡ-3Ｂスカイウォリア。任務を終えて帰投。後方にはＦ-4ＪとＡ-7が見える。ＶＡＱ-130のニックネームは"ザパーズ"（Zappers）。

〔下〕輸送・連絡機として使われている艦上多用途機Ｃ-1Ａトレーダー。エンジンを始動，主翼をのばしてスタートするところ。

創立25周年記念

# アンドリュウス空軍基地の

アメリカ空軍が陸軍から独立して一本立ちしたのは1947年。昨年がちょうど25周年目とあって、各地でいろんな行事が行なわれたが、これもその一つ。9月16、17日の両日一般に公開されたメリーランド州アンドリュウス空軍基地では、空軍の現用機全機種が展示され、"サンダーバーズ"の華やかな飛行などもあって、約5万人の観衆がつめかけた。その主な展示機をご紹介することにしよう。

〔上〕F-111F可変翼戦闘機。マウンテイン・ホーム空軍基地をホームとしている第347戦術戦闘連隊(347TFW)第391戦術戦闘飛行隊(391TFS)の所属機。〔下〕A-7Dコルセア II。サウス・カロライナ州のマートルビーチ空軍基地で編成された第354戦術戦闘連隊(354TFW)第511戦術戦闘飛行隊(511TFS)の所属機で、テイル・レターは"MR"。〔右ページ中・下〕F-100D戦闘爆撃機とF-106A迎撃機。

# 航空ショー

(上)RF-4Cファントム II。現用の第一線戦闘攻撃機F-4は人気のマト。

（上）HC-130NからHH-53Bヘリコプターへの空中給油の実演。こうした飛行ショーのほか、格納庫を使った屋内展示場には、空軍の25年の歩みを語る資料なども展示された。

（上）胴体側方から機銃を突き出したAC-119Kパケット対ゲリラ攻撃機。第1特殊作戦航空団（1SOW）第415特殊作戦訓練飛行隊（415SOTS）の所属機。（下）C-123Kプロバイダー輸送機。第302戦術空輸航空団（302TAW）第356戦術空輸飛行隊（356TAS）機。

(上)2次大戦から朝鮮戦争にかけての老兵B-26インベイダー。この機体は、25周年を記念してスミソニアン博物館に寄贈されることになったもので、公開会場で贈呈式が行なわれた。

(上)エア・ナショナル・ガードで使われているC-121Kコンステレーション。(下)EC-47"ターニイ・バード"。最近"老兵"C-47は、いろいろに改造されて各種の任務に使われている。

# フォート ニュース

〔上・下〕コルセアIIの複座練習型ＹＡ-7Ｈ原型１号機。Ａ-7Ｅをもとに改造した本機。最近コルセアII-2と呼ばれているようである。前席・後席とも同じ１枚風防。写真のように右側に開く横開き式。飛行中の脱出は風防を先きにとばして飛び出すが、風防が開かないときは頭あてで風防を突き破って出る。（ＬＴＶ　photos）

〔上〕オーストラリア空軍のF-4E。F-111Cの代りとして同国空軍に貸与されている24機のうちの1機。F-111Cの領収とともに返還されることになっている。〔下〕カリフォルニア州チャイナ・レイクの海軍ウェポン・センターで訓練中の海兵隊第513飛行隊のハリアー。翼下は2.75インチ・ロケット弾ランチャーとスネーク・アイ爆弾。

〔上〕コンコルドの量産前期型02に搭載されたオリンパス602エンジン。原型の001、002に積まれている593-2A、2Bエンジンにくらべて、騒音・排気量が削減されている。

〔上〕ボナンザ軽飛行機をベ スにした多用途軍用機がビーチ で改造され、米陸軍のテストを けている。写真がそのビーチP -249で、翼下のパイロンには 5 kgまで各種の武装を懸吊できる か、キャビン内は完全な複操縦 照準器もついており、右側には 物も積み込めるので、COIN や練習機として好適。ボナンザ 共通点が多いので、「すべてが くつく」といまさかんに売込み 行なわれている。なお、生産機 胴体を25cm延長してすこし大型 することになっている。

〔下〕NASAの手で飛ばさ ているコンベア990旅客機改造 "空飛ぶ研究室"。キャビンの 井には多数の観測窓があり、中 は各種の計測装置が積まれてい これで地球資源、空気力学、天 学、海洋学、太陽などの研究資 を得るのが目的。これだけの大 観測装置を積んで、高度14,000 で安定した観測をできるのがま

〔右〕ロッキード・カリフォルニア社が、ロッキードL-1011トライスターの乗降用に開発した自動タラップ。前部貨物室に装備されており、スチュワーデスがボタンを押せば、上の写真のように自動的に展張するようになっている。地上設備のないリゾート地域への飛行用に設計されたもの。

〔下〕広大な国土を持つオーストラリアでは、新聞配達にも軽飛行機が活躍している。これはニュー・サウスウェールズのタムウォース飛行場でのシーンで、フレンドシップの運んできた新聞を区別けして、地方への配送のために小型機に積み込むところ。

# スナップ だより

（上）百里基地に配備
ているF-4EJファン
11 1号機。お翼下面
ァルコン空対空ミサイ
装備して飛行訓練中（
農市・標科岳昭）。
（下）タイ国向けの川
V-107ヘリコプタ。
地にて（春日井市・
2）。

〔上〕11月初めに横田基地に飛来した第11哨戒飛行隊（VP-11）のP-3Bオライオン。大西洋方面に派遣されている同飛行隊のオライオンが、横田基地に姿を見せたのはこれが初めてである（昭島市・酒井明徳）。

〔下〕これも11月初めに横田基地で撮影したF-4D。第3戦術戦闘航空団（3TFW）第35戦術戦闘飛行隊（35TFS）の所属機で、風防の下と垂直尾翼先端をブルーで塗り、吸気口ベーンに警告マークらしきものをくっつけている（三鷹市・清水克家）。

# リパブリックP-47Dサンダーボルト

イタリア戦線のP-47D戦闘機。ブラジル空軍の第1戦闘中隊所属機。

# リパブリック P-47D サンダーボルト

## REPUBLIC P-47D THUNDERBOLT.

〔上〕各国空軍で使われたサンダーボルト。右から，イギリス，アメリカ（手前），ブラジル，（左端は不明）のサンダーボルトで，すべてP-47D（イギリス空軍はサンダーボルトII）。ブラジル空軍のパイロットは，1944年1月にアメリカに渡って陸軍空軍のもとで訓練をうけ，P-47Dの1個戦闘中隊を編成してヨーロッパ戦線に送られ，米第12空軍の麾下に入って同年11月11日に初出撃している。終戦までに同空軍の戦闘中隊に与えられたP-47Dは全部で88機，戦後の1955年にさらに25機を受領して，2個戦闘爆撃大隊（各3個中隊）を本機で編成している。P-47Dの数機は，1960頃年まで戦闘爆撃機として同国空軍で使われていた。

〔右〕イタリー戦線で闘ったサンダーボルトの1機。P-47D-10-REで，"チェッカー・テイル・クラン"で名高い第325戦闘大隊の第318戦闘中隊の所属機。P.B.バウド中尉の愛機で，"スピリット・オブ・ミルウォーキー・カウンテイ"号。同地名産のビールをつめたジョッキイを画いている。

MILWAUKEE
COUNTY

〔左〕P-47Dの主翼内弾倉に装てんされる12.7mm機銃弾。この機体は現存するアメリカのトップ・エース，フランシスS．ガブレスキ中佐の愛機。同中佐は大戦中，第56戦闘大隊第61戦闘中隊の中隊長として欧州戦線で活躍。撃墜機数は31機。のちに朝鮮動乱にも出撃して終身の撃墜機総数は37機1/2。旺盛は攻撃魂を持ったファイターであった。写真はイギリスのある基地にて，28機撃墜のころのものである。

〔上〕これはイタリア戦線のP-47D。第15空軍第325戦闘大隊第319戦闘中隊の所属機で，D.P.カーンズ中尉の愛機。ピストルを持ったいせいのよいヤンキー・ガールを画いている。

〔下〕これもイタリアに送られたブラジル空軍第1戦闘機中隊の所属機。愛機に乗ってポーズをとっているのは，R・サルダナ曹長。同中隊は1944年10月に欧州に派遣され，米第12空軍の傘下に入って戦っている。

第９空軍第36戦闘大隊第53戦闘中隊のP-47D-28RA。P-47D-27以降の型は，方向安定性改良のために，ドーサル・フィン（背ビレ）がつけられることになったが，なかには，この写真のように改造を受けない機体もあった。

第９空軍第36戦闘大隊第53戦闘中隊のP-47D-28RA。P-47D-27以降の型は、方向安定性改良のために、ドーサル・フイン（背ビレ）がつけられることになったが、なかには、この写真のように改造を受けない機体もあった。

〔上〕P-47B（初期型）の機首クローズアップ。B型は，171機生産されたP-47の最初の量産型で，外形は原型のXP-47Bとほとんど同じである。本機に装備した2,000HPのR-2800エンジンは，全長1.991m，直径1.341mという空前の大きさで，この写真からもP-47の機首の巨大さがうかがわれる。また，B型のプロペラはカーチス・エレクトリック製で，その直径は4.16mである。

なお，前ページの第53戦闘中隊のP-47D-28RAの機体塗装は，全面無塗装銀で，アンチ・グレアはオリーブドラブ，カウリング先端は53中隊のスコードロン・カラーであるブルーに塗られている。垂直尾翼と水平尾翼の黒い帯は，レコグニッション・マークで，帯の幅は12インチと15インチである。また，コール・ナンバーは黒で書かれており，各文字の寸法は高さが$7\frac{1}{2}$インチ，幅5インチ，字間は$1\frac{1}{2}$インチとなっている。

〔上〕ヨーロッパ戦線で活躍した第8空軍のP-47D。機上のフロリダ州デイトナ・ビーチ出身のH.S.グリーン大尉の乗機。フランス戦線にて。風防の下の赤い記号は，爆弾の形が爆撃機援護の出撃回数，星印が撃墜機数を示すものと思われる。

〔左〕尾翼に赤と白のしま模様を画いた第12空軍のP-47D。同空軍の戦闘機部隊は，主にイタリア方面で戦っている。パイロットはウイリアム・ベネデイクト少佐である。

# FOCKE-WULF *FW190D-9*

(1)(2) Fw190D-9 OF III/JG54 BASED AT ACHMER, GERMANY

(3) Fw190D-9 IN STANDARD SCHEME LATE 1944–45

(4) Fw190D-9 CRASHED AT WEMMEL, NEAR BRUSSELS ON 1ST JANUARY 1945.

①② Fw190D-9　ドイツのアッハマーに駐留した第54戦闘航空団第3飛行隊の所属機

③ Fw190D-9　1944年後期から45年頃の標準塗装にした機体

④ Fw190D-9　1945年1月1日、ベルギーのブラッセル近郊に不時着した機体

②

③

④

C A.Hashimoto

# フォッケウルフ Fw190D-9

## *FOCKE-WULF Fw190D-9*

有名なFw190シリーズの後期型で，空冷型のBMW発動機を液冷式のユンカース・ユモ213発動機に換装，胴体尾部を延長するなど一部改装されたのが，このDシリーズの機体で，通称「長っ鼻」と呼ばれて最大速度704km/hr（高度11,300m）の高速を誇った。

### ☆キット紹介☆

レベルの1/32ビッグ・シリーズに新しくFw190D-9のキットが追加され，現在新発売中である。可動部はプロペラと車輪だけであるが，キャノピがスライド開閉し，機首の機銃カバーとカウリングが着脱式で，詳細なユモ213発動機を内蔵，コックピットも精巧につくられている。モデルのプロポーションも素晴しいもので，D-9型のイメージを忠実に再現した優秀作品。デカールは4種のバリエーションを楽しめるようになっているほか，大型カラー図がついている。

### ☆塗装について☆

図①と②　III/JG54の所属機で，胴体側面と機体下面はライトブルー[20]，胴体の背と翼上面はブラックグリーン[18]とダークグリーン[17]のスプリンター・タイプ迷彩，胴体側面にRLMグレーのはん点迷彩がある。プロペラ・ブレードは黒つや消し[33]で，スピナは黒つや消しに白いうず巻の線入り，国籍マークは胴体と翼上面が白，翼下面は黒ふちだけの十字となっている（キットにはこの機体のデカールが附属）。

図③　胴体側面はライトブルー[20]またはライトグレー[37]+[1]+[30]の地色でダークグリーン[17]のはん点迷彩があり，胴体の背中に至るほど迷彩密度が濃くなっている。翼上面はブラックグリーン[18]とダークグリーン[17]のスプリンター・タイプ迷彩で，下面はライトブルー[20]，主翼上面の十字マークは胴体と同じ

図④　胴体側面と機体下面がライトブルー[20]で，胴体の側面にRLMグレーのはん点迷彩があり，胴体の背と翼上面はブラックグリーンとダークグリーンのスプリンター迷彩，スピナは図①③と同じよう黒つや消し[33]で，白のうずまきライン入りである。翼上面と国籍マークは白ふちだけの十字，胴体と翼下面は図のように黒ふちだけの十字となっている。（K.Hashimoto）

データ〈technical data〉

全幅〈span〉10.5m，全長〈length〉10.2m，全高〈height〉3.36m，全備重量〈gross weight〉4,830kg，発動機〈engine〉ユンカース・ユモ〈Junkers Jumo〉213A-1（2,240HP）×1，最大速度〈max. speed〉688km/hr（高度6,600m），航続距離〈max. range〉840km，武装〈armament〉20mmMG151×2；13mmMG131×2，乗員〈crew〉1。

The FW 190D-9 is the latter version of the WWII German FW-190 series. It is known that improvements were made in the FW-190 over and over again since its first flight in 1935. On the occasion of D-series, the air-cooled engine was replaced with the liquid-cooled Junkers-Jumo 213 engine, and the rear part of the fuselage was expanded. D-series, generally called "Long Noses", could reach a speed of 704 km an hour at an altitude of 11,300 meters).

**KIT:**

Revell has recently place a kit of FW 190D-9 into its 1/32 series. The large kit, now on sale, is gaining popularity, especially because of its good proportion truely depicting the image of the WWII German masterpiece. Movable are the propeller and wheels. The canopy has a sliding device to open, while the machinegun cover and the cowling are removable. The elaborate Jumo 213 engine and the cockpit are attractive. The kit fans can fully enjoy the variation by attached four different decals. A large size color figure is also informative.

**PAINTING:**

Fig. 1 & 2. This belonged to III/JG54. The sides of the fuselage and the bottom surfaces of the plane are Revell Color (RC) 20, light blue. The top of the fuselage and the upper wing surfaces are camouflaged with RC-18, black green and RC-17, dark green in a splinter scheme. On the fuselage sides is also an inkspot camouflage of RLM gray. The propeller blades are RC-33, non-glare black. The spinner is non-glare black with a white spiral line. The "cross" nationality markings on the fuselage and upper wing surfaces are white-hemmed, while those on the lower wing surfaces are black-hemmed. (The kit on sale has the decal of this plane.)

Fig. 3. The sides of the fuselage are RC-20, light blue or RC-37, 1 and 30, light gray, with an inkspot camouflage of RC-17, dark green. The camouflage is gradually thick as it comes to the fuselage top. The upper wing surfaces are camouflaged in a splinter scheme with RC-18, black green and RC-17, dark green. The lower wing surfaces are RC-20, light blue. The "cross" markings on the upper wing surfaces are similar to those of the fuselage.

Fig. 4. The sides of the fuselage and the lower surfaces of the plane are RC-20, light blue. The fuselage sides have also an inkspot camouflage of RLM gray. The fuselage top and upper wing surfaces are camouflaged in a splinter scheme with black green and dark green. The spinner is RC-33, non-glare black with a white spiral line, like those of Fig. 1 and 3. The nationality markings on the upper wing surfaces are white-hemmed, while those on the fuselage and the lower wing surfaces are black-hemmed. (K. Hashimoto)

| Fw190Dの塗装に必要なレベル・カラー | |
|---|---|
| ①ホワイト | ⑧シルバー |
| ⑰ダークグリーン | ⑱ブラックグリーン |
| ⑳ライトブルー | ㉖ダックエッググリーン |
| ㉗機体内部色 | ㉘黒鉄色 |
| ㉝黒つや消し | ㊲グレー75 |

**フオッケウルフFw190D-9戦闘機** 米軍にろ獲された機体で，塗装は主尾翼と胴体上面がダークグリーンとブラックグリーンの迷彩，下面と側面はライトブルーのように思える。なお，垂直尾翼両側面に白でFEナンバー（Foreign Equipment No.）が書かれており，この機体はNo.21である。1945年9月30日の撮影。

# HAWKER *TEMPEST*

①② TEMPEST MK.5, FLOWN BY WG CDR R. P. BEAMONT, WING LEADER OF NEWCHURCH TEMPEST WING.
③ TEMPEST MK.5 OF No.249 SQDN
④ TEMPEST MK.5 OF No.501 "COUNTY OF GLOUCESTER" SQDN

①② テンペストMk.5 ニューチャーチ・テンペスト大隊の指揮官R.P.ビーモント中佐の乗機
③ テンペストMk.5 第249中隊の乗機
④ テンペストMk.5 第501「カウンティ・オブ・グロセスター」中隊の乗機

© K.Hashimoto

# ホーカー テンペスト Mk.5

*HAWKER TEMPEST Mk.V*

ホーカー・ハリケーンの設計者シドニー・カムの設計した，ホーカー・タイフーン1型戦闘機の性能向上型といえる機体で，タイフーン1型の厚い主翼を再設計して薄い層流翼をつけて部分的に大幅な設計変更を行なったタイフーン2型が，のちにテンペストと改称され，このテンペストシリーズが始った。

テンペスト5型は1945年8月までに約800機が生産され，1944年6月からの大陸反攻作戦に参加，鉄道車輌や地上施設の攻撃に活躍，V-1ミサイル撃墜にも，はなばなしい戦果をあげた。

☆キット紹介☆

レベルの1/72シリーズから，このテンペストMk.5のキットが発売中で，小つぶながらシャープで実機の特徴を忠実に再現した素晴しいキット。マニアは部分的に手を入れてやると完ぺきのモデルとなる。

☆塗装について☆

図①②　テンペストMk.5塗装は機体の上・側面がダークグリーン[23]とダークシーグレー[25]の迷彩，下面はメディアムシーグレー[25]+[1]+[30]，スピナと胴体後部の帯がスカイ[24]，主翼と胴体には図のように白と黒のインベイジョン・ストライプスがある。シリアル・ナンバーはJN751で，スカイの帯の部分だけに文字があり，左面は751のナンバーだけ，右はJNの文字だけが記入されており，残りの文字は白帯で消されている。

プロペラ・ブレードは黒で先端が黄色，主翼前縁には味方識別用の黄色塗装がなされている。

図③　テンペストMk.6　機体の上・側面がダークアース[22]とミドルストーン[21]の迷彩で，下面はアズールブルー[34]+[1][3]，スピナは黒で胴体の帯はスカイ[24]。

図④　テンペストMk.5，図①と同じダークグリーンとダークシーグレーの上・側面迷彩で，下面はメディアムシーグレー，スピナと胴体の帯がスカイの塗装，シリアルはEJ605。　(K.Hashimoto)

データ〈technical data〉

全幅〈span〉12.49m，全長〈length〉10.06m，全高〈height〉4.9m，全備重量〈gross weight〉5,175kg，発動機〈engine〉ネピア・セイバー2B〈Napier Sabre IIB・2,420HP〉×1，最大速度〈max. speed〉678km/hr，実用上昇限度〈service ceiling〉10,800m，航続距離〈range〉1,300km，武装〈armament〉20mm×4，爆弾〈bomb〉900kgまたはロケット弾〈rockets〉，乗員〈crew〉1。

The Hawker Tempest is an advanced model of type 1 Hawker Typhoon fighter, which was designed by Sydney Camm. In remodeling the type 1 into the type 2, improvements were made in various parts including the replacement of the thick wings with thin ones, the attachment of laminar wings and etc. Later, the type 2 Typhoon was renamed "Tempest", thus commencing the high efficient Tempest series.

A total of some 800 Tempest Mk. 5 fighters was produced by August 1945. This model participated in the "continental counterattack" operations starting June 1944, and played an active role in attacking railroads, vehicles and other ground facilities. Its distinguished services against V-1 missiles are also noticeable.

**KIT:**

A small but smart Tempest Mk. 5 kit is now on sale from Revell's 1/72 series. It is literally a gem in that it closely follows the image of the WWII fighter. An aircraft fan will make it a complete model without difficulty.

**PAINTING:**

Fig. 1 & 2. Tempest Mk. 5. The top and sides of the plane are camouflaged with Revell Color (RC) 23, dark green and RC-25, dark sea gray. The bottom surfaces are RC-25, 1 and 30, medium sea gray. The spinner and the belt on the rear part of the fuselage are RC-24, sky. Black and white invasion stripes are on the wings and fuselage, as shown in the figure. The serial number of this plane is JN751. However, as it is written only on the part of the "sky" belt, it cannot read entirely. The sky belt is not wide enough to cover the whole, JN751. Only figures, "751" are seen on the left, while only letters, "JN" on the right.

Propeller blades are black and their tips are yellow. The wing front edges are painted in yellow to discriminate the plane from that of enemy.

Fig. 3. Tempest Mk. 6. The top and sides of the fuselage are camouflaged with RC-22, dark earch and RC-21, middle stone. The lower surfaces are RC-34, 1 and 3, azure blue. The spinner is black and the belt on the fuselage is RC-24, sky.

Fig. 4. Tempest Mk. 5. The top and sides of the fuselage are camouflaged with dark green and dark sea gray, similar to Fig. 1. The lower surfaces are medium sea gray. The spinner and the fuselage's belt are sky. The serial number is EJ605. (K. Hashimoto)

テンペストの塗装に必要なレベル・カラー

| | |
|---|---|
| ①ホワイト | ③レッド |
| ④イエロー | ⑧シルバー |
| ㉑ミドルストーン | ㉒ダークアース |
| ㉓ダークグリーン | ㉔スカイ |
| ㉕ダークシーグレー | ㉚フラットベース |
| ㉝黒つや消し | ㉞スカイブルー |

**ホーカー テンペストV戦闘機** 初期のテンペストV（JN730）で，上側面ダークグリーンとオーシャングレイの迷彩，下面はシーグレイメディアム。胴体後部の帯はスカイタイプSである。なお，この機体はホーカー社で45ガロン増槽を装備してテストに使用したものである。

# 零式艦上戦闘機21型

## MITSUBISHI A6M2 ZERO FIGHTER

A A6M2 with folding its wing tips, open engine cowl-flaps, and extended flaps and arrester hook.

両翼端を折りたたんだ零戦21型。この写真は、当時の兵器説明書に添付されていた1枚で、開き下げ式のフラップをおろし、カウル・フラップも開いて、着艦フックもおろしている。バックを消してあるらしく、脚支柱や風防まわりに、修正のあとが見える。

A6M2s of Ōita KOKUTAI (Air Corps); the Fighter Training Unit where most Zero fighter pilots received training before being posted to an operational unit. Note the lack of engine access panels on the right hand aircraft.

〔上〕大分航空隊の零戦21型。同航空隊で零戦パイロットの実用訓練に使われた機体である。右側の1機は、エンジン・カウリングをはずして始動中。尾翼の“オタ-141”の記号は、白帯に黒という変った書き方である。

A crash-landed A6M2 of Ōita KOKUTAI.

〔左ページ下〕これも大分航空隊の零戦21型で、おそらく主脚を引込んだままで胴体着陸をしたものであろう。エンジンははずされているが、前面の滑油タンク、主翼に引き込んだ主脚の支柱など、外からは見られない細部がよくわかる。〔上〕灯火をたよりに整備中の零戦21型。プロペラを交換中の整備員たちは上半身はだか。南方の航空基地ではよく見られた光景であった。

**Mechanics in the process of removing the propeller on a A6M2 at an airfield in South Pacific front. ▲**

**All set up to go! A6M2s prepare to take off at the airfield in Rabaul. ▼**

南方の激戦地ラバウルで発進準備中の零戦21型。各機とも明灰白色の上に暗緑色の不規則迷彩をしている。

# 未発表 陸軍機写真集

成層圏飛行用の研究機として陸軍が開発したロ式B（製作を担当した立川飛行機の呼称はSS-1）。昭和16年末頃に製作開始、ロッキード14輸送機を改造して、与圧気密室を設けた2機が完成して、終戦までに数回テスト飛行を行なっているが、当時は"特秘"扱いの貴重な研究機。これまで写真が公表されたことは一度もなく、関係者以外には"幻の翼"でもあった。この写真は終戦とともに進駐してきた米軍の一員が立川基地で撮影したもの。1号機、2号機のいずれかはさだかでないが、戦後しばらく、ほかの軍用機とともに処分を待って同所に放置されていたときのものである。ほかに転用したのかエンジンがはずされ、主脚もない。（本文記事参照）。

Rare photo of a rarer bird……An Army Roshiki-B (SS-1) High Altitude Research Aircraft at Tachikawa Airfield Aug.－Sept. 1945. Developed for the purpose of high altitude flying research, marrying the wings, tail unit and other components of the Lockheed 14 transport aircraft to a re-designed fuselage equipped with pressurized cabin, only two of this aircraft had been manufactured by war's end.

〔上・右〕アメリカ本土でテストされた1式戦闘機隼2型乙。米海軍の航空諜報局では、フイリピンなどでろ獲した隼各型をテストして、大戦末期には、そのデータをまとめた「日本航空機の性能と特性」なるものを作製して空戦の参考としているが、戦後も、接収した数多くの陸海軍用機とともに、数機の隼を米本国に運んでいる。

高オクタン・ガソリンを使ったテストでは、すべて日本側の実測値を上まわる高性能を発揮しており、隼2型は最大速度55.69km/hrという記録も出している。

飛行テストが終ったのちも、飛行可能な日本機は各地に飛んで、飛行や地上展示などで一般にも公開されているが、写真の機体も1945年にデラウエア州のドーバー空軍基地を訪れたときのスナップである。

(Above and right) An Army Ki43II Otsu HAYABUSA captured by U.S. forces in Philippine during the war. Flight characteristics of the HAYABUSA published by the U.S.Technical Air Intelligence Center were presumably based on tests of this plane. This photos were taken at Dover AFB, Dover, Delaware in 1945 when the captured HAYABUSA visited the base. (Photos by Mr. C. M. Daniels)

A Ki61-I HIEN, No.70 aircraft assigned to No.244 SENTAI (Fighter Group) at Chōfu Airfield for the Defence of Tokyo city. (Photo by Mr. C. M. Daniels)

〔上〕終戦の頃，調布飛行場に放置された3式戦闘機飛燕1型。同飛行場を基地に帝都防空に活躍した第244戦隊の70号機。

米軍の手によってテストされる4式戦闘機疾風。この機体はおそらくフイリピンでろ獲された1機と思われるが，同機を使ってのテストは1945年3月頃に行なわれており，隼と同じように「日本航空機の性能と特性」のなかに記載されている。それによると，最高速度は687km/hrと，"太平洋戦争決戦機"にふさわしい高性能。日本では絶対に出せなかった高速を出せる戦闘機として特筆されている。
写真の少ない4式戦闘機疾風。滑走中と飛行中のこのスナップ，塗装は変っているが貴重な記録である。エンジンもオリジナル，整備すれば飛行可能という状態で現存する疾風は，現在アメリカにわずか1機。大戦機は次第にわれわれの前から姿を消していく。

A Ki84 HAYATE captured probably in Philippine by the U.S. forces is being flown by American pilot with USAF Markings.
This plane was taken to the U.S. after the war and placed on static display.

Captured Army Warplanes photographed at the Airfield near by Tokyo after the war: Ki44 SHOKIs, Ki61 HIENs in the front left and right, Ki45 Kai TORYUs in the background.

〔上〕南の基地で米軍にろ獲された陸軍機。左側手前は2式単座戦闘機鍾馗、後方は2式複戦屠龍、右手には3式戦闘機飛燕が並んでいる。

〔下〕ハンガーのなかの陸軍機。手前は特殊攻撃機のキ115剣、後方はキ102襲撃機で、尾翼に飛行第3戦隊のものと思われるマークを画いている。これも終戦直後、米軍に接収され、ここに集められたもの。

A Ki115 TSURUGI Special Attack Aircraft in the front and A Ki102 Otsu twin Assault Aircraft of No.3 SENTAI (3rd Fighter Group) in the background.

A crush-landed Ki43-II HAYABUSA and Type Zero Transport aircraft in the background.

〔上〕同じく終戦時に連合軍側に接収された1式戦闘機隼2型。胴着した機体であろうか、プロペラが曲っている。後方は零式輸送機。進駐してきた米軍が撮影したもので、立川基地と思われる。
〔下〕これも接収された陸軍機で、手前から4式戦闘機疾風、キ115剣、プロペラがはずされた4式重爆飛龍。

From front to back; A Ki44 HAYATE, Ki115 TSURUGI and Ki67 HIRYU Heavy Bomber.

このページは、特攻攻
用機としてつくられたキ
特殊攻撃機。ブリキ製の
その下面には800kg爆弾
半埋込み式に装備できる
になっていた急造の体当
発進すると主脚は投下し
器類も、片道飛行に必要
小限の数個が、申しわけ
についているというまっ
おそまつな飛行機であっ
終戦までに105機が造ら
が、幸か不幸か実戦には
も参加していない。
ここの写真は戦後しば
のあいだ横田空軍基地に
されていた1機。同機は
東京都立航空工業高専に
されている。写真でおわ
のように中央風防はなく
きさらしのまま進撃する
閉爆弾"でもあった。

This Ki115 TSURUGI was photographed while on display at Yokota Air Base, near Tokyo. Later this aircraft was returned to Japanese hand and subsequently being stored at TŌKYO KŌGYO KŌSEN (Aviation College).

# ブリストル ボーファイター

高性能の長距離双発戦闘機として開発されたブリストル ボーファイター。のちにはA I（機上迎撃用）レーダーを積んで、イギリス空軍最初の夜間戦闘機となり、本土防空戦に活躍、コースタル・コマンド（沿岸航空隊）にも装備されて、雷撃機としても使われている。中東から極東方面にも送られて、その活躍の舞台は広い。

ブリストルが自主開発として本機の設計に着手したのは1938年末。ボーフォート雷撃機の主翼、後部胴体、尾部をそのまま転用、前部胴体を再設計して、エンジンを新しくしたブリストル156がその原型。原型1号機（R2052）は1939年7月に完成、まもなく初飛行というところで航空省に採用され、F.17/39の仕様が与えられて、原型4機と第一次生産分300機が発注された。

写真上と下は1939年7月17日に初飛行した原型1号機。写真下は最初の頃のもので、滑油冷却器をエンジン・カウリング下面に取りつけているが、のちにこれは上の写真のように主翼前縁に移されている。原型1号機以降では、このほかプロペラ・スピナー、主脚扉などが改造されている。原型1号機にひきつづいて、2、3、4号機が1940年5月までにつぎつぎに完成、飛行している。

〔上〕ボーファイター原型３号機（Ｒ2054）。同機は原型４号機（Ｒ2055）とともに、1938年末頃から採用されることになった20ｍｍイスパノ機関砲の発射テストなどに使われている。両機とも４門ずつ装備、３号機は60発のドラム給弾方式、４号機は新しいサーボ給弾方式でテストした結果、最初の量産50号機までは前者を採用することになった。

〔上と右ページ上〕1940年７月から生産が開始された最初の量産型ボーファイターⅠ。この機体（Ｘ7579）は、センチメトリックＡＩ .ＭＫ.Ⅶレーダーのテストに使われたもので、右ページ上の写真でよくわかるように、機首がスインプル（指ぬき）形に改造されている。〔下〕1940年９月頃から戦闘部隊に配備されたボーファイターⅠＦ。

〔下〕ボーファイターⅠF。この機体（V8324）は、第29スコードロンの所属機で、1942年7月から11月までの間、ケント州のウェスト・マーリングを基地に出撃。機首に、ウォルト・デイズニイのまんがからとったバンビーの絵を書いている。

〔下〕同じくボーファイターⅠF。ⅠFが実戦部隊に配備されたのは1940年9月。第25と上記の第29スコードロンが最初の部隊で、同年9月と10月に初出撃している。つづいて第600と604スコードロンも同じ頃に本機で実動態勢に入った。

〔上・下2枚〕コースタル・コマンドのボーファイターⅠF。ボーファイターはブレニムⅣFの代替機としてコースタル・コマンドにも装備されることになった。その最初の型がMk.ⅠCで、Mk.Ⅰの無線・航法装備を強化したもの。1941年春に、アルダーグローブの第143スコードロンが最初に装備して、対艦船攻撃や味方艦船の護衛の任についている。

ここの写真は、ⅠCが完成するまでのあいだ、コースタル・コマンドの第252スコードロンが一時装備したボーファイターⅠF。ブラウン・グリーン・スカイの3色迷彩に、スカイのコード・レターをつけている。

ボーファイターⅠFに、AⅠレーダーを積んだのはレッドヒルの第219スコードロンの機体が最初で、ボーファイターは1940年11月頃から夜戦としてドイツの夜間爆撃機の迎撃に出撃することになった。夜戦としての初戦果は1940年11月19日、第604スコードロンの1機が、ユンカースJu88を撃墜している。この年の末頃には、約200機のボーファイターが実戦部隊に配備されて、ドイツの侵攻機を迎え撃った。

# エアラインの翼

## BOAC　英国航空　⑤

〔上〕ご存知の傑作機ダグラスＤＣ-3ダコタ。BOACが本機を路線に就役させたのは大戦中の1943年５月。当時同社の本拠でもあったウイットチャーチからリスボンへの路線に飛ばしたのが最初。大戦中は英空軍の軍用輸送の委託をうけて、リスボン、ダカール、アルジェリア方面に盛んに飛んでいる。終戦時の装備機は59機。うち55機余が大戦中を生きぬいた“老兵”であったという。正に傑作機にふさわしい働きぶりである。

〔下〕大戦後、新しい輸送機が出現するまでのつなぎとして使われたハンドレベイジ・ハルトン１。ハリファックスＣ.8爆撃機を改造したもので、12機が造られている。BOACでは1946年７月に１号機（写真のG-AHDU）を受領、西アフリカやカイロ、カラチ方面の路線に使っている。本機は1947年末頃からカナデアＤＣ-4Ｍに代って次第に姿を消し、1949年末には、すべてスクラップにされている。

# “生きている”博物館　シャトルワース コレクション

昨年の本誌10月号で紹介したシャトルワース・コレクション。イギリスのベッドフォード市郊外のオールド・ウォールデンという小さな村にある世界でただひとつ、展示機が、その生きた当時のままで“生きている”（つまり飛べる状態で保存されている）唯一の博物館。今回から連載でふたたびその主なものをご紹介することにしよう。

〔上〕ブレリオ　タイプXI。1909年にはじめて英仏海峡を横断したブレリオ機の姉妹機で、その後の複製機と違って1910年にイギリスの飛行学校で使われていた機体そのものという貴重なもの。現在でも飛行可能で、木製羽布張りで25HPエンジン付きのこの機体は古典的のなかでも最も格調高いもののひとつ。

〔下〕ブリストル　ボックスカイト。この機体を見て「どこかで見たことがあるな…」と感じれば相当の飛行機マニア。実は、これは映画「素晴らしき飛行機野郎」に出演した機体のひとつ。ただし、これはレプリカ（複製）で、本物は1910年に造られ、軍から4機を受注したのをはじめとして100機以上が世界各国に売られた。技術的にはフランスのファルマンを真似たところが多いが、これで航空機産業を興そうとしたブリストルの心意気がこもっているという。

（上）アブロ　トライプレーン　ローIV。1910年に造られた3葉機で、75HPエンジンを備えているが、1機しか造られなかった。写真の機体は、ボックスカイトと同様に、映画「素晴らしき飛行機野郎」のために3機造られた1機。（下）デパーデュシン。1910年にレース出場を狙って造られた機体で、最初は30HPだったが、のちには160HPエンジン付きのものまで出場した。この機体は、1935年にシャトルワース氏個人が入手して再生し、今日まで飛べる状態のまま保管されている。

（下）ブラックバーン1912年。ロバート・ブラックバーンが1912年に造った7機目の飛行機で、現存する数少ない初期の航空機のひとつ。50HPのノーム　ロータリー・エンジンを機首につけ、木の骨組みに羽布を張ってある。ブラックバーンはその後、ブラックバーン航空機会社を発展させ、いまでは同社はホーカー・シドレー・グループの1員となっている。

〔上〕S.E.5a戦闘機。第1次大戦に参加したイギリスの代表的戦闘機のひとつで、王立航空機工場（現在の王立航空機研究所）で製作され、実に5,025機が造られた。写真の機体は、第2次大戦後に機体部分だけアームストロング・ホイットワース社の工場の天井からつるされていものを発見され、これにアメリカで発見したイスパノスイザ200HPエンジンをつけて、1959年9月4日に"初飛行"したもの。いまでももちろん飛べる。

〔上〕ホーカー　トムテイト。1929年に造られた練習機で、当時としては非常に進歩した技術を用い、特徴ある機体であった。機は全金属製で、学生はフードを付けて盲目飛行の訓練もできた。ホーカー社が他の軍用機の生産に追われた関係もあって、小数しか造られなかったが、同社の手で長いあいだ保管されて展示にも出品され、1959年にここに移管されてからもまだ充分に飛べる状態にある。

〔上〕同じくフロリダ州のテンダル空軍基地を中心に去る9月18日から29日までの間に開催された"ウイリアムテル'72"の参加機。上と下の写真はバーモント州エア・ナショナル・ガード第158戦闘大隊（158FQ〕第134迎撃戦闘飛行隊(134FIS)の所属機。同飛行隊の本拠地はバーリントン空港。増槽には"ザ・グリーン・マウンテイン・ボーイズ"の文字を書いている。

(Photos by Mr. Roy Lock)